

思い出のおにぎり

福山市立誠之中学校 一年 早川 拓真

猛暑が襲う日本の夏、楽しい夏休みが始まるうとしていている。だが、今年の夏もあまり楽しめなさそうだ。先生から渡される大量の夏休みの課題と通知表。地獄だ。通知表なんて目を向ける気にもならない。

渡れて学校から帰ると無性にお腹が空く。ストレスがたまるとたくさん食べたくなる。

これは僕だけに限ったことではないだろう。家に帰って炊飯器をのぞいてみると大量のご飯が残っていた。ちようどお腹がすいていたの下炊飯器からご飯をすくっておにぎりを作った。うまく三角形にするのはなかなか難しい。ようやく出来止がったおにぎりは、本格好だったけど、なんだかおいしかった。自分で作ったおにぎりだからよりおいしいのかもしれない。

その時ふと、祖母のことを思い出した。小

学校低学年のころ、放課後児童クラブから帰ると僕は祖母の家に行っていた。帰ってくるのと机の上にきれいな三角形のおにぎりがお皿の上においてあった。祖母が、「お腹、空いてるでしょう。」と優しい声で食べさせてくれた。すごくおいしかった。かみしめるたびに具のおいしさが口の中で広がった。だいたいの個くらいのおにぎりが並んでいた。その中に入っている具はいつも違っていた。小さな僕をたくさん楽しませるためだ。その思いは小さな僕でも感じられるものだった。

中学年・高学年になると僕は祖母に反抗するようになった。祖母は元教師ということもあり、物言いがすごく嫌味だったらしくて話が長い。それにいつも僕は反抗していた。でもすぐに仲直りして、おにぎりを作ってくれた。小学校6年生になると僕は祖母の家によろずい、家に帰るようになった。しかし、祖母は家が近いこともあって心配してきてくれるこ

ともあった。そして、来てくれるたびにおにぎりを作られた。

そんなことを思い出しながら僕は自分で作った不格好なおにぎりを食べていた。ふと祖母に会いたくなかった。元気だろうか。ここ4ヶ月会ってない。おにぎりを食べ終わったらすぐに祖母の家にかけてみた。祖母はあいつも変わらず元気だった。僕は祖母にありがたうと伝えかけた。小さなころにお世話になっただけという感謝の気持ちを込めて、これ

からもよろしくという気持ちを込めてありがたうという言葉を送った。今まで照れくさくてなかなか伝えられなかったその言葉。今日こそは、今日こそは、そう思っていた。

「ありがとう」。

僕が発した小さな小さなその声は届かずに消えた。代わりに響いた祖母の懐かしいあの声。おにぎりできたよ。

僕の声をかき消すかのようなそのはつきりした声に、僕は思わず

うん。

という言葉しか出てこなかった。

本当は僕のかき消された小さな言葉は祖母に届いていたのかもしれない。そんなことを思いながら祖母の作ってくれた、きれいな三角形のおにぎりを一口、また一口と食べた。

祖母の作ってくれたおにぎりは今日もおいしかった。

残暑残る中、祖母は静かに息を引きとった。

何のお別れも言えなかった。あの時、こんな時、感謝の言葉を伝えればよかったと後悔した。大好きだった祖母を僕は忘れないだろう。絶対に。永遠に。